

資料紹介

嶋田義仁・松田素二・和崎春日編
アフリカの都市的世界 京都 世界
思想社 2001年 323p.



本書は、アフリカ都市研究の第一人者である日野舜也氏の東京外語大アジア・アフリカ言語文化研究所退官を区切りとして作られた。11名の人類学者が執筆しており、日本のアフリカ都市研究のこれまでの蓄積だけでなく、現在のアフリカ都市人類学の最尖端を知ることができる。

本書は三部構成で、「序章 アフリカ都市研究と日本人研究者」、「Ⅰ アフリカ伝統都市のダイナミズム」、「Ⅱ 現代アフリカ都市の生活世界」に分かれている。序章では、アフリカの都市研究についての世界的な研究の流れを紹介すると共に、日本における研究についても包括的な紹介を行っている。この序章は、第Ⅰ部・第Ⅱ部でとりあげるケース・スタディそれぞれの位置づけを明確にする役割を果たしている。

第Ⅰ部では、植民地化される以前から存在する伝統都市のもつ動態性に着目している。国際交易や都市での社会集団同士の接触などによって、どのように都市が発展してきたかを五つの論文によって分析している。

そして第Ⅱ部では、「現代アフリカ都市」という切り口のもとに、「そこに暮らす人々の日常を出発点とする歴史や社会の見直しの可能性」(p.192)を追求している。総論的な松田論文「現代アフリカ都市社会論序説」に続いて、四つのケース・スタディを取り上げている。

巻末の充実したリーディング・リストとともに、アフリカ都市研究の道標となる本である。

(児玉由佳)

楠瀬佳子著 増補改訂 南アフリカ
を読む——文学・女性・社会 東
京 第三書館 2001年 463p.



本書の著者である楠瀬佳子氏を通じてアフリカ文学や演劇に初めてふれた人も少なくないだろう。楠瀬氏は、アフリカ文学作品の翻訳や紹介に精力的に取り組むにとどまらず、アフリカ人作家や劇団等の日本招聘にも積極的に関わってこられた。

本書は1994年刊行の同名書(本誌No.19で紹介)の増補改訂版である。本書において著者は、現実の社会状況を映し出す鏡として文学作品を読み解いていく。女性を抑圧する社会構造を明らかにし、ペンだけを武器にその抑圧と闘う女性作家たちに深い共感を寄せる。なかでも、アフリカ人として、労働者として、女性として、三重に差別されてきた南アフリカのアフリカ人女性作家に対する思いは強い。女性の出版契約を認めない法律や厳しい検閲と闘いながら小説を書き続けたミリアム・トラージェィ。白人専用の公衆トイレに身を隠しながら、ほとぼり出る「誰かに話したいこと」をひたすら書きつづったチナ・ムショーペ。そして、アパルトヘイト後の真実和解委員会で証言した有名無名の女性たち。真実和解委員会における女性たちの証言は、口承伝統を引き継ぐ「語りの文学」であると著者はいう。

著者は、作家との出会いをととても大事にしている。まず、作品を通して出会う。そしてさらに、実際に会って、言葉と抱擁を交わしながら、作品世界への理解と共感を深めていく。そのような著者にとって、1986年に急死したために会えなかったベッシー・ヘッドへの思いは、とりわけ強いのかもしれない。「ごく普通の人間」としての生活を獲得するために、壮絶な闘いをしなければならなかったベッシー・ヘッドについては、著者による『ベッシー・ヘッド——拒絶と受容の文学』(第三書館 1999年)を、是非あわせて読みたい。

(牧野久美子)

峯陽一・畑中幸子編著 憎悪から
和解へ——地域紛争を考える
京都 京都大学学術出版会
398p.



本書は、中部大学国際地域研究所において「人の移動」「地域紛争」「多民族国家」をテーマにした共同研究の成果である。冷戦後多発する地域紛争とそれを取り巻く環境について、政治学、経済学、歴史学などの分野から8人の研究者がアプローチしているが、その目的は、単に紛争構造の分析ではなく、科学的な考察に基づいた紛争の予防、紛争終結後の平和構築、難民救済のための現実的な処方箋を探ることであり、政策指向性の強い研究となっている。

全体は3部構成であり、第1部では地域紛争の特徴となっている大量の難民が取り上げられ、少数の政治難民を前提とした従来の保護制度にかわる安定的な難民保護のあり方が、受入国における他民族との共存の問題に触れながら論じられている。第2部では、地域紛争を終結させた南アフリカ、エルサルバドル、北アイルランドを取り上げ、紛争によって増幅された憎悪を乗り越えて共存を目指す各国の取り組みをもとに、多民族共存のための制度的枠組みが探られている。第3部ではよりマクロな視点から、国際的な安全保障システムおよび地域紛争の背景となっているグローバリゼーションに目を向け、国家から非国家アクターへの紛争主体のシフトに対応した紛争予防、早期終結のための方策が、唯一の大国となったアメリカの動向を軸に論じられている。

各論文は総じて、具体的な紛争事例の記述よりも、紛争を取り巻く法制度、政治システムなどの分析に重点が置かれており、そのため紛争に巻き込まれた人々の顔は見えにくい。より大きな枠組みで紛争予防、解決、多民族共存のための普遍的な解決の方向が考察されている。また、各論文の視点は多様であるが、「壊れかけた羅針盤を修理し、新世紀の航海の見取り図を手に入れようとする努力に、少しでも貢献できないものだろうか」(序章 p.3) という共同研究の問題意識は強く共有されていることが感じられる。研究書としてだけでなく、紛争問題に関心を持つ人々にも薦めたい。

(福西隆弘)

総合研究開発機構(NIRA) 横田洋三
(共編) アフリカの国内紛争と予防
外交 東京 国際書院 2001年
542p.



過去15年ほどの間に多発しているアフリカ各地の紛争は、近年研究者のみならず外交政策に携わる人々の注目も集めている。本書は、国際政治学や予防外交の専門家とアフリカ地域研究者が、それぞれの専門分野の視点からアフリカの国内紛争の現状について論じ、今後の課題を探ろうとした研究書である。

本書の執筆者は総勢23人を数えており、全体で542ページにもおよぶ大部となっている。構成は4部構成ではじめの第1部で予防外交の理論的考察がおこなわれ、第2部および第3部でアフリカの紛争に関する事例研究と現状分析が、第4部で予防外交に対する提言がおこなわれている。予防外交の専門家が主に第1部と第4部を執筆し、アフリカ研究者は主に第2部と第3部で個別国の事例とアフリカ独自の要因の分析を担当している。事例として取り上げられている国は20カ国にのぼり、また予防外交自体についても様々な視点からの理論整理がおこなわれている。研究アプローチのこのような包括性が、本書の大きな特徴となっている。

一口にアフリカの紛争といっても、その発生要因は国によって多様である。土地、民族、開発、政治、植民地経験、他国の介入などのさまざまな要因が、その国独自の歴史的経緯の中で複雑に絡まりながら現出するのが現代アフリカの紛争の特色である。したがって紛争予防のための処方箋は、各国の状況の十分な理解なしには有効たりえない。一方アフリカ各国で発生している国内紛争の解決には、国際社会の協力が不可欠であることも近年の経験が明確に示している。この意味でアフリカの紛争予防には、アフリカ地域の専門家と予防外交の専門家との協力が不可欠である。本書はそのような協力関係を大きく前進させる、画期的な成果である。

(高根 務)

鈴木雅雄・真島一郎編 文化解体の想像力——シュルレアリスムと人類学的思考の近代 京都人文書院 2000年 542p.



この論集は、他者との出会いを契機とした新たな批評性の獲得という共通する思考手法に着目して、シュルレアリスムと人類学を組上に載せ、ブルトン、レリスら思考の実践徒たちがいかにしてその方法に逢着し、可能性を探求したかにまつわる22の論文を収録する。真島一郎、工藤多香子、深澤秀夫、渡辺公三の4人の人類学者が寄稿している。

論考ごとの関心が多岐にわたるといふ編者の言明に甘え、偏りのある紹介を許していただけるならば、本書では「調査者が調査行においていったい何と出会っているのか」という問題が提起されている。冒険ライターの粗雑な西アフリカ報告に引き込まれ、ダン族とドゴン族を調査対象に決定したM・レリスが、実際にフィールドに赴いて己の幻想ぶりに打ちのめされる過程を綴った真島論文と、「ここではないどこかへ」という意味での「逃走」を企て、1910年代のマダガスカルに渡航したポーランという人物を取り上げ、堅実な勤務ぶりを示すなかで己の「逃走」の夢から疎外され、一転してマダガスカル語の世界に没入していく過程を綴った深澤論文は、「劇的な発見の旅」などもはや期待しようもないという状況がすでに今世紀初頭に経験されていたことを明らかにしている。

さらに両論文は、二重の旅の経験——記述対象のそれと著者のそれ——が反映された興味深いテキストでもある。両著者とも記述対象が赴いたのと同じ土地での長期の調査経験を持つが、そのことを念頭に置くと、半世紀以上も前の調査者の幻滅を書き記す調査者たる筆者の姿が行間に立ち現れ、そのことによって記述にはただならぬ重み感が感じられてくる。もしや、この両論文についても、レリス的な意味での「誤差の計測」を可能にするような主観性を湛えた民族誌としての読みが可能なのだろうか。まさに旅先にてこれを書く評者は、その問いから立ち上る、旅と旅に関する記述の輻輳する関係について思いを馳せ、本論集の主題である「想像力」について、ささやかな省察を繰り返してみるのであった。

(佐藤 章)

富永智津子著 ザンジバルの笛——東アフリカ・スワヒリ世界の歴史と文化 東京 未来社 2001年 221 + xvii p.



ザンジバルはアフリカ東部沿岸からおおよそ40キロのところにある。インド洋の珊瑚礁に囲まれており、現在は、タンザニア連合共和国に属している。本書は、このザンジバル島を中心に展開された「スワヒリ世界」の歴史と文化を資(史)料とフィールド調査に基づいて描いたものである。

スワヒリ語の起源は、インド洋の季節風を利用し、オマーンやイエメンのアラブ商人がダウ船で訪れるようになったころに遡る。アラビア語と現地のバントゥー語が混合して15世紀ごろにはその形が整ったと考えられている。「キルワ年代記」によると、ザンジバル・シラジ王朝の起源はペルシアの古都シーラーズから移住してきた家族である(シラジ伝説)という。現在行われている「ナイルージ」という新年を祝う祭もイランの新年祭「ノウルーズ」に由来するらしい。

シラジ王朝にかわって、スワヒリ世界の最盛期をもたらしたのが、オマーン王であり、ザンジバルの王にもなったサイド王(在位1804~56年)である。この時代には奴隷貿易も行われており、大陸の内陸部にも規模の大きな隊商によって商業圏が広げられ、ザンジバルの中心都市ストーンタウンの町は貿易港として繁栄し、欧米各国の商人、探検家も訪れるようになる。クローブ・プランテーションは奴隷の労働力を利用することで発展していった。けれどもやがて奴隷貿易は欧米で反対運動がおこり廃止に向かい、同時にオマーン王による支配は欧米列国の争いの渦中にほうり込まれることになる。

世界史の縮図ともいえるザンジバルの歴史を、実在する人物を中心に、生き生きと描き出した力作である。本文中の写真・図表とともに年表、索引も充実している。

(鈴木陽子)

北川勝彦著 南部アフリカ社会
経済史研究 大阪 関西大学出
版部 2001年 380p.



北川勝彦氏によるマンローの
訳書『アフリカ経済史1800～
1960』（ミネルヴァ書房 1987年）を読んで目を開か
れた強い思いが、著者との最初の出会ひであったろう
か。同書とほぼ同時に出たレイサムの『アジア・アフ
リカと国際経済1865-1914年』（川勝平太・菊池紘一
訳 日本評論社 1987年）との2冊が、私のアフリカ
経済史理解の基本を形成してくれた。本書にはそのマ
ンローが頻繁に引用されるので、私の読み方が間違っ
ていなかったとの確信を得ることができた。北川氏も
マンローに強く影響されたのだから。

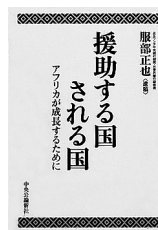
本書には1974年からの著者の代表的な仕事が収録
されている。北川氏の仕事ぶりに感銘を受けつつその
後を追いかけてきた積もりでいた評者は、本書が世に
出なければおそらく知らずに過ごしたであろう多くの
論攷に初めて接することができて、まことに幸甚であ
る。アフリカ経済史研究に、そして南アフリカ研究に
北川氏がいてくれたことを改めて感謝したい。

本書はアフリカおよび南部アフリカに関する通史で
もあり、その経済史研究史でもあり、また著者自身の
研究史でもある。当然さまざまなテーマが内包されて
おり、読者はそれらひとつひとつの含蓄を味わうこと
ができる。しかし初出が学術論文であるだけに、関連
知識と学術的関心の有り様によって、その味わいには
差が生じるであろう。まずは一読して論点の広がり
を頭に収め、自身の研究テーマの進展に併せて再び参
照を求めるといふ永い付き合い方を勧めたい。

歴史理解を踏まえぬ地域研究など存在しようがな
い。「ジャパニーズ・アフリカニスト・ヒストリアン」
（「あとがき」より）の手になるアフリカ史、アフリカ
経済史への導きの糸がこうして与えられる幸福に、他
学者は報いなければならない。指針が欲しくなった
ときに帰っていける頼もしい文献が、またひとつわれ
われの書籍棚に燦然と加わった。快哉。

（平野克己）

服部正也遺稿 援助する国される
国——アフリカが成長するために
東京 中央公論新社 2001年
p.257.



アフリカに係する本誌の読者なら、独立直後のル
ワンダで中央銀行総裁を務め、1970年代を世界銀行で
過ごし80年には世銀副総裁に就任した服部正也氏の
名前を御存知であろう。若い世代で知らないという方
には、特に援助関係者には、本書を手取ることを強く
勧めたい。服部氏を知らずして日本とアフリカの関
係史は、さらに日本の援助経験の深みは語れないから
である。戦後復興期を援助の世界で、しかもアフリカ
との関わりがなかで生きた服部氏は99年に亡くなら
れた。おそらくは後進に篤い使命を託されて。

同氏には『ルワンダ中央銀行総裁日記』（中公新書
1972年）という名著があるが、本書は冥界に赴かれる
直前に書きためておられたという後継世代への最後の
メッセージだ。筆致はきわめて力強く、想いに満ち、
その洞察力に圧倒される。開発実務や援助政策につ
いて書かれる文章は概して退屈な通り一遍に終始して
いるものだが、この本はまったく違う。アフリカ開発
への関わり方が総合的かつ大局的であり、論のすべて
が著者に内化されている。紋切り口調の術語の羅列な
どこにもない。「公式見解」などで逃げたりはしない
のである。著者の肉声がどんどん迫ってくる。

民間投資の不在が頻りに論じられるアフリカだが、
公的資金を加えての総資金投入量では、アフリカはア
ジアやラテン・アメリカをはるかに凌いでいたとい
う指摘はまったくそのとおりでである。しかしその手
痛い挫折。アフリカ問題はその点に集約される。

ルワンダのフツ政権の評価には異論もあると思う。
累積債務の扱い方については評者は異なる考えに立
つ。しかしこれらを含めて直截な意見表明は刺激的で、
本書に満載された小手先ではない開発提言の数々には、
「大正世代」日本人の雄大さを感じてやまない。アフ
リカの経済開発と援助のただなかで生きた、卓越した
個人史を見ることができる。もう少し早く生まれて服
部氏の訶咳に触れたかった。合掌。

（平野克己）